Ⅱ．調査・研究報告

豊原町出土の小銅鋺について

木村　健明

１．はじめに

本稿で扱うのは、茨木市西部に位置する豊原町（図１・２）で令和４年度に行った試掘調査において出土した遺物である。調査地は令和６年度時点で周知の埋蔵文化財包蔵地に含まれていないが、敷地の西側を通る南北方向の道路を挟んだ西側は宿久庄遺跡の範囲となっている(図２･註１)。

調査では現地表下2.5ｍまでの範囲で埋蔵文化財の有無を確認したが、中世から近世頃の耕作土と考えられる堆積を確認したに留まった。この土層中より遺物が出土したが､二次的な移動の結果、耕作土中に含まれたものと判断され、新規に埋蔵文化財包蔵地として周知するには至らなかった。ただし、小銅鋺という特徴的な遺物が出土しているため、資料紹介を行うこととした。

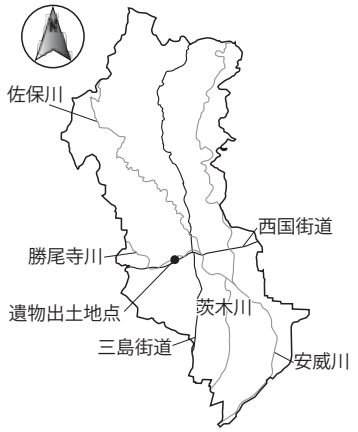

図１　遺物出土地点位置図

２．出土遺物

出土した遺物は土師器・須恵器・瓦質土器・青銅器である（図３・写真１）。土師器および瓦質土器の羽釜片が大半を占めており、土師器皿・須恵器鉢は図示した小片各１点のみである。

以下で図示し得た出土遺物について記す。なお、法量・調整などは表１に記載している。

小銅鋺（図３－１・２）　１と２は同一個体と考えられるが器壁が薄いこともあり、明確な接合箇所を見出すことができなかった。そのため、個々に図化を行った上で、別途図上で復元したものも呈示した。１は口縁部である。現状では破断して一部が欠損しており歪みが認められる。口縁端部は外側に肥厚し､外側に極細い２条の刻線が巡る。器壁の厚さは1.5㎜程度と極めて薄い。２は底部である。外面に高さ１㎜程度の高台をもつ。

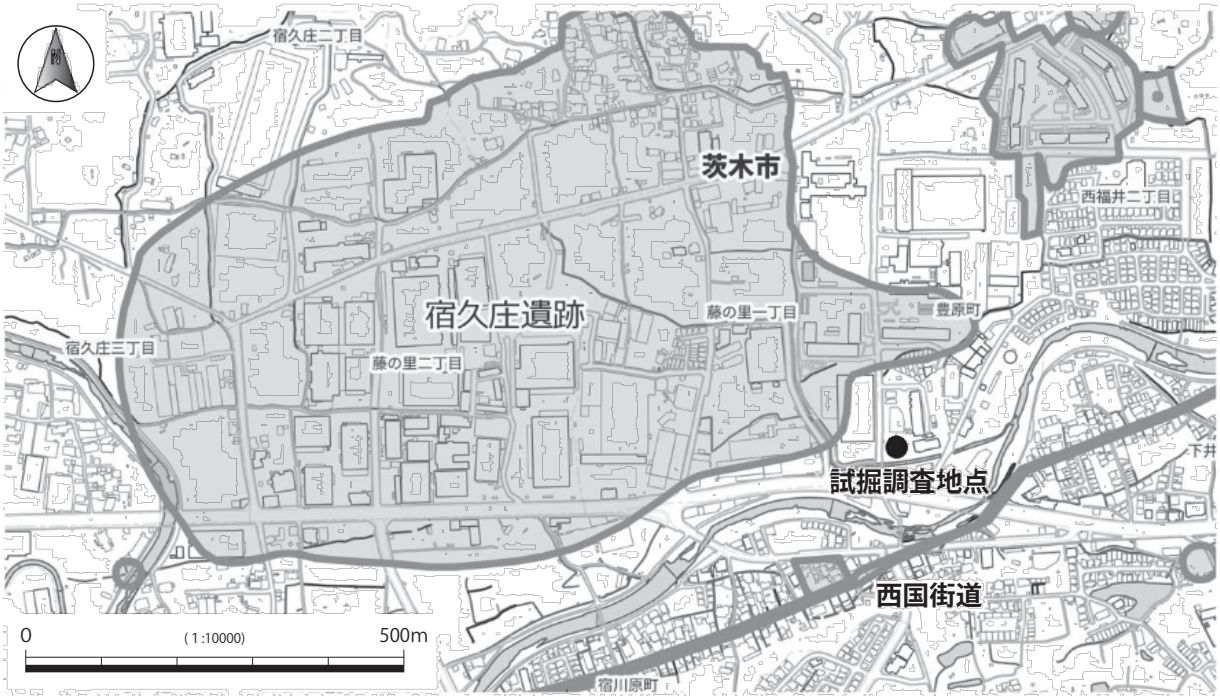

図２　調査地点周辺の状況図

土師器皿（図３－３）　口径 12.1 ㎝、器高 2.3 ㎝として図示したが、小片であり僅かに残る底部内面の屈曲を基にしたため、誤差をもつ可能性がある。そのため時期は判断し難い。

須恵器鉢（図３－４）　小片であり、断面を図示し得たに留まる。口縁端部が内側に巻き込む特徴的な形状から、東播系須恵器鉢Ⅳ類（14 世紀末～ 15 世紀）と考えられる（佐藤 2022）。口縁端部外面に黒色釉がかかる。

瓦質土器羽釜（図３－５）　鍔はほぼ水平に延びる。口縁部はほぼ直立し、端部上面に凹線を施す。体部外面にナデ、内面にハケを施す。鍔の上下に煤が付着する。鍔の下面は被熱により灰褐色を呈する。菅原分類の摂津Ｅ型（菅原 1983）に相当すると思われる。

土師器羽釜（図３－６～８）　６～８はいずれも菅原分類の摂津Ｅ型に相当すると思われる。６は比較的短い鍔をもつ。口縁部はほぼ直立する。口縁部外面に凹線をもつ。内面にハケを施す。７は鍔が水平に延び、口縁部は直立する。口縁部外面に凹線２条を施す。鍔の上下に煤が付着する。８は口縁部が内傾する。口縁部外面に段をもつ。鍔はほぼ水平に伸びるが、やや下方に下がる。口縁部内面の一部にのみハケを施す。

羽釜の時期は 13 ～ 14 世紀頃と考えられる（菅原 1983）。

これらの遺物の時期から判断して、小銅鋺も 13 世紀～ 15 世紀の間と考えられようか。

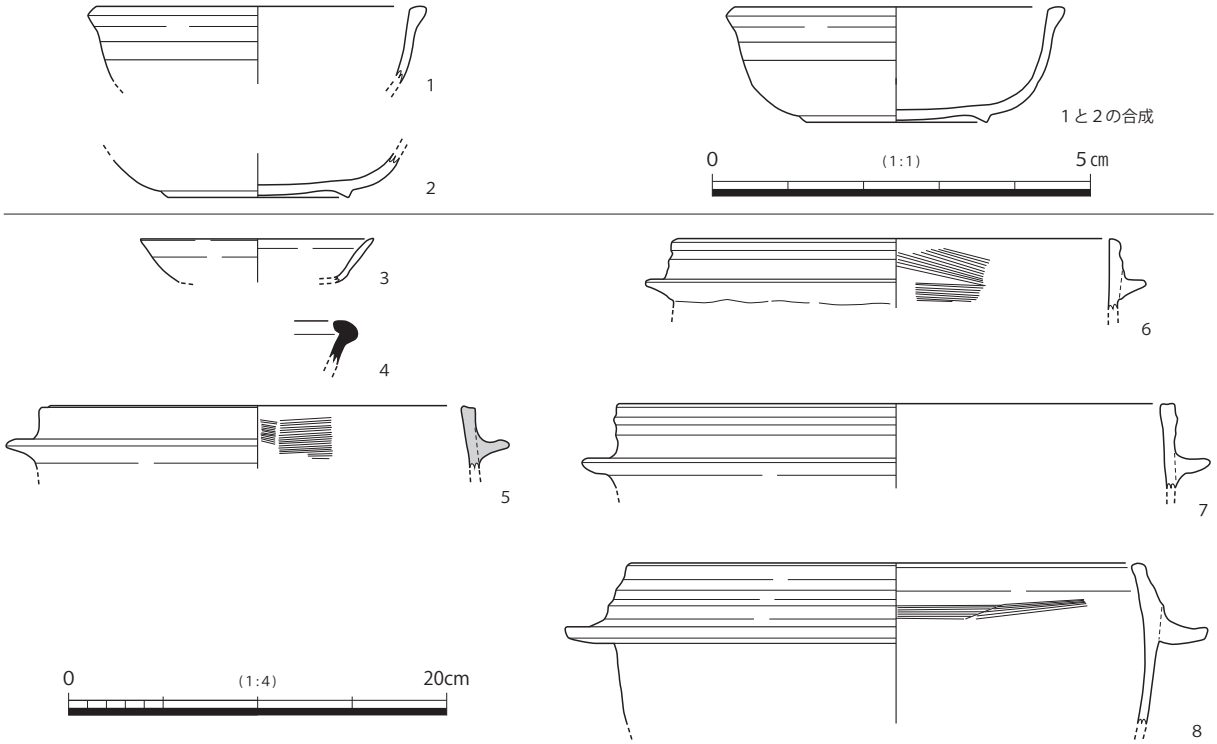

図３　出土遺物実測図

表１　遺物観察表

番号	器種	器形	法量(㎝)	残存	色調	胎土	調整	備考
1	青銅器	小鋺	口径：4.2 器高：△1.0	口縁部：2/3	－	－	外面：刻線２条	２と同一個体か
2	青銅器	小鋺	底径：2.3 器高：△0.6	底部：完形	－	－	－	１と同一個体か
3	土師器	皿	口径：(12.1) 器高：2.3	1/8	外・断・内：7.5YR7/3 にぶい橙	密	内外面：ナデ	
4	須恵器	鉢	器高：△2.3	－	外・断・内：N6/灰	密	内外面：ナデ	口縁部：施釉
5	瓦質土器	羽釜	口径：(21.6) 器高：△3.3	1/16	外・内：N4/灰 断：N8/灰	密	外面：ナデ 内面：ハケ	鍔の上下に煤付着
6	土師器	羽釜	口径：(22.6) 器高：△3.8	1/12	外：7.5Y4/1灰 断・内：2.5Y8/1灰白	密	外面：ナデ・凹線１条 内面：ハケ	
7	土師器	羽釜	口径：(28.0) 器高：△4.5	1/12	外：N4/灰 断：2.5Y8/2灰白 内：7.5Y4/1灰	密	外面：凹線２条 内面：摩滅のため不明	鍔の上下に煤付着
8	土師器	羽釜	口径：(35.4) 器高：△8.5	1/8	外：10Y6/1灰 断：2.5Y8/1灰白 内：5Y8/1灰白～ 10YR6/1褐灰	細かい砂粒 を多く含む	外面：ナデ 内面：ハケ・ナデ	

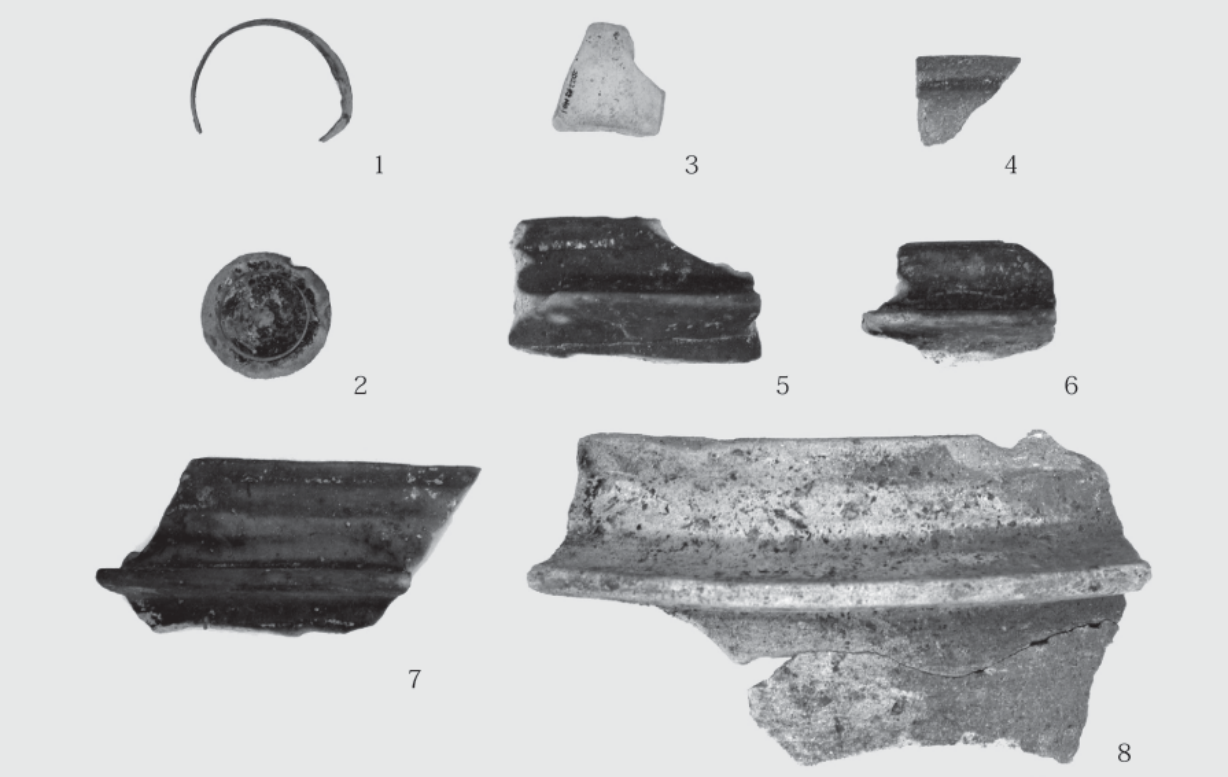

写真１　出土遺物

３．小銅鋺の検討

小銅鋺は、仏具の可能性を考えた。仏具の中で鋺形態のものには、密教法具の六器と二器がある（註２）。仏具は伝来品も多いが、図示されたものは現時点で確認できていない。

一方、数は少ないながら、出土事例があり図も公表されている（註３）。今回、他府県の事例は確認しきれていないが、大阪府内の出土事例には、和泉市槙尾山経塚（和泉市久保惣記念美術館 1983）と門真市普賢寺遺跡（尾上 1999・門真市 2022）の２遺跡がある。

槙尾山経塚例は六器と花瓶が出土しており、平安時代後期と考えられている。

六器は２点出土しており、法量は口径 7.1 ㎝、器高 2.6 ㎝、高台径 3.6 ㎝を測る。

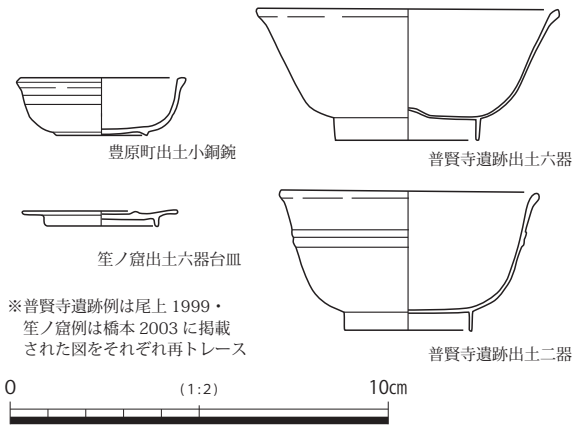

図４　普賢寺遺跡例の六器・二器との比較

普賢寺遺跡例は鎌倉時代後期と考えられており、六器・二器・火舎が出土している。

普賢寺遺跡の六器は４点出土している。口径 7.6cm、器高 3.4cm、高台径 3.6cm のもの３点と、やや小型な口径 6.8 ㎝、器高 3.3 ㎝、高台径 3.1 ㎝のもの１点である。二器は１点で口径 6.8 ㎝、器高 3.7 ㎝、高台径 3.5 ㎝を測る。体部に二条の紐を巡らす。

図４は参考として普賢寺遺跡例と豊原町例および奈良県上北山村笙ノ窟（註４・橋本 2003）例を同一縮尺で示したものである。豊原町例と六器の台皿（口径 4.0 ㎝、器高 0.8 ㎝、高台径 3.0 ㎝）である笙ノ窟例はかなり小形であることが分かる。笙ノ窟には、参籠堂が存在したと考えられており、出土した遺物は修験者が窟内で用いたものと考えられている。このことから、小形の仏具も存在したといえよう。

豊原町出土例も仏具として良いと思われる。なお、普賢寺遺跡例と比較した限りでは、口縁部がやや直立気味であることと外側に刻線が巡ることから、二器の方に近い印象を受ける。

４．まとめ

今回、出土した小銅鋺を仏具と考え、資料紹介

を行った。小形の仏具が山岳修験と関わる物であれば、箕面市から高槻市にかけての北摂山地には山岳寺院が多く所在していることが注意される（藤岡・山口 2008・茨木市教育委員会 2015・高槻市立しろあと歴史館 2015）。また、瓦器小椀のように仏前作法で用いられたもの（鳥羽 2007）であれば、周辺に寺院の存在を考えることができようか。

今回、推測によった部分が多く、今後より多くの事例を確認していく必要がある。しかし、中世の茨木市域の様相を窺う一助となる遺物といえよう。今後も多様な資料の紹介を継続していくことで、茨木市の歴史のより詳細な復元に資することにつとめたい。

註

1）今回の試掘調査地点に隣接する地点では、平成 11 年（1999 年）に商業施設の建設に伴って 1999-4 調査が行われ、主に調査区の西側で 13 世紀の中頃から後半にかけての遺構・遺物が多く確認されている（茨木市教育委員会 2023）。

2）六器は「６種供具のうちの閼伽、塗香、華鬘に使用する器を各２口ずつ揃えるため全部で６口となり六器と称する。高台のついた小鉢に台皿を備えるのが普通である。」とある（山川 2003）。また二器は、「灑水器と塗香器は、前者が少し大形である以外は、全く同一の意匠で製作されるので、同類の意味で二器と呼ばれる。」とある（蔵田 1967）。六器との違いとして、六器より大形であること、宝珠鈕の蓋を備えること、鉢の外面に帯を巡らすことが挙げられている。

3）今回は金属製品のみを取り上げているが、他の材質のものに、瓦器小椀がその形態・法量から六器・二器の椀として用いられたと考えられている（鳥羽 2007）。また木製の密教法具も存在し（鳥羽 2003）、様々な材質の法具が使用されていたことが窺える。

4）笙ノ窟は奈良県吉野郡上北山村に所在し、大峰山脈の大普賢岳東方約 1 ㎞、標高 1,450 m に位置し、南面する絶壁の下部に開口する自然の岩窟である。平安時代以来、多くの修験者が参籠する場として著名である。岩窟内には寛喜四年（1232 年）の銘框板を有する銅造不動明王立像が祀られていた（橋本 2003）。また、343 本もの釘が出土していることから、窟内に参籠堂が建てられていたと考えられ、復元案も提示されている（寺本 2020）。

参考文献

和泉市久保惣記念美術館 1983『和泉槙尾山経塚発掘調査報告書』

茨木市教育委員会 2015『龍王山をめぐる信仰と人々－山岳寺院の軌跡－』

茨木市教育委員会 2023『宿久庄遺跡２』

尾上　実 1999「資料紹介－門真市普賢寺跡出土の密教法具」『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報２』大阪府教育委員会　pp. 32-33

岡崎譲治 1986「密教法具」『新版仏教考古学講座』第５巻　仏具　pp. 173-224

門真市 2022『普賢寺遺跡』公益財団法人　大阪府文化財センター 編

蔵田　蔵 1967「仏具の種類　３密教法具」『日本の美術』第 16 号　仏具　至文堂　pp. 58-79

佐藤亜聖 2022「東播系須恵器」『新版　概説中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会 編　真陽社　pp. 219-230

菅原正明 1983「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立 30 周年記念論文集刊行会 編　同朋舎　pp. 726-758

高槻市立しろあと歴史館 2015『大阪の修験と西方浄土－神峯・葛城山と日想観の山寺－』

寺本就一 2020「笙ノ窟参籠堂推定復元図の再考察」『山岳信仰と考古学Ⅲ』 山の考古学研究会 編　同成社　pp. 65-78

鳥羽正剛 2003「天野山金剛寺求聞持堂伝来の木製密教法具－真言宗の密教経典・儀軌、儀礼からみたその成立背景－」『続文化財学論集』文化財学論集刊行会　pp. 365-374

鳥羽正剛 2007「瓦器小埦にみる特異な使用痕に関する考察（その２）－天台密教の仏前作法からの検討－」『中世土器の基礎研究 21』日本中世土器研究会　pp. 125-142

橋本裕行 2003「笙ノ窟の測量と発掘調査」『大峰山岳信仰遺跡の調査研究』財団法人 由良大和古代文化研究協会　pp. 45-54

藤岡穣・山口隆介 2008「竜王山と忍頂寺の仏教美術」『新修茨木市史』第九巻　史料編美術工芸　茨木市　pp. 34-84

山川公見子 2003「六器」『仏教考古学事典』雄山閣　pp. 422